

医療過疎、防げ

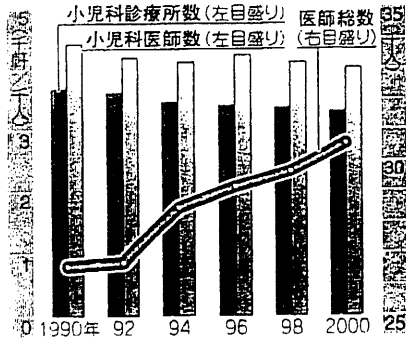
都が異例の小児科研修

内科開業医
など対象 夜間初期救急に力

小児科医が急減し、特に夜間の初期救急の診療体制が手薄になっていることから、都は、小児科以外の開業医を対象にした異例の小児科研修を始めた。研修終了後は、区市町村が行う平日夜間初期救急センターなどの当番医へ参加を要請。少子化を背景に問題となっている大都会の小児科「過疎」の解消を目指す。

研修の対象は、小児科医四十五人が応募した。研修終了後は都知事名義で開業医、都立病院や大学病院などで計四十八時間、小児救急の知識や、薬の用意など実践的な外來診療を学ぶ。都は二十四人分の予算を組んだが最終的に予算を大きく上回り、墨田、目黒、板橋、府中、町田など十三区市の主に内科の開業医に研修センターの運営費補助を本年度から始めた。都内の小児科医師数は医師総数の増加に反比例して減少。小児科開業医の数も減っている。入院治療が必要な病気を扱う二次救急で都が昨年度二十四時間体制で小児科医が診療する休日・夜間診療の問題が浮上。輪番制の事業を始めたが、95%が軽い風邪や腹痛など初期救急の患者だった。このため、担当の小児科医に過度の負担がかかったり、本来の重症患者の診療に影響が出るなど「開業医や医師会なども地元の小児救急に危機感を募らせている」と分析。来年度は四十人規模の研修を計画する。

都内の小児科医師数などの推移



の研修受講を要求する考えで、「小児科開業医が二十三区より少ない多摩地域の体制整備が課題」としている。



夕刊
 ©朝日新聞社 2002年
 〒104-8011 東京都中央区築地5丁目3番2号
 朝日新聞東京本社
 電話 03-3545-0131

平成14年11月9日(土)
 1面

小児救急輪番制

国立の参加わずか25%

病院・療養所 「東高西低」傾向

急患の子供がいつでも受診できる「小児救急」の整備が遅れているとされる問題で、複数の小児科医がいる国立病院と国立療養所が、小児科の輪番制などの態勢に25%しか参加していないことが朝日新聞の調べでわかった。輪番制は各病院が持ち回りで休日や夜間に診療態勢を続けるもので、厚生労働省が進める小児救急拡充策の柱。地域医療の中核である国立施設でさえ過半数が協力しない実態が浮かびあがった。

全国にある国立病院と国立療養所は計194カ所。国立がんセンターなど専門医療センターを除くと、常勤小児科医が複数いるのは国立病院53、療養所50の計103カ所。このうち輪番制に参加したり、一つの施設で24時間、365日、小児救急を受け付けているのは国立病院で17病院(32%)。療養所は9療養所(18%)だった。小児救急態勢づくりに参加しているのは関東、甲信越以北に多く、関西、中国、四国と西に行くに従って減っている。九州は福岡県以外ではすべて参加している。厚生労働省は99年度から、全国360に区分けされた医療圏ごとに、休日や夜間でも小児科医が救急を受け入れる病院を輪番で受け持つよう指示した。103の国立施設は86の医療圏に分散しており、このうち輪番制などが整備できているのは37医療圏(43%)だった。津軽(青森)、福島県の奥中、甲府、別府速見(大分)など7医療圏は国立病院と療養所のい

れもあるのに、輪番制が

●輪番制や拠点病院を担っている国立病院・療養所
 【国立病院】仙台病院、栃木病院、高崎病院、西埼玉中央病院、千葉病院、相模原病院、松本病院、静岡病院(静岡)、金沢病院、滋賀病院、姫路病院、神戸病院、奈良病院、米子病院、岡山医療センター、福山病院(広島)、高知病院
 【国立療養所】西札幌病院、下志津病院(千葉)、神奈川病院、医学王病院(石川)、中信松本病院、長良病院(岐阜)拠点、三重病院(拠点)、香川小児病院(同)、福岡病院(同)

発足できていない。国立病院が参加しない理由の多くは、より高度で専門的な医療に集中している救急医療にまで手が回らないためという。結核や進行性筋ジストロフィーなど慢性的な疾患を扱う療養所は、救急への即応態勢ができていないことがネックだ。

鳥取県の国立療養所西鳥取病院は医療圏に輪番制があるのに参加していない。「長期療養型の病院なので救急とは専門が違ふ」と説明する。一方、「小児救急に取り組むべきだが、医師や薬剤師、看護師の協力がなかなか得られない」(同南岡山病院)という所もある。

厚生労働省医政局指導課は「国立病院部には、可能な施設は輪番制への参加をお願いしてきた」と言う。一方、国立病院部は「(各国立病院に)積極的にやれとは言っていないが、社会的な要請もある。今後の課題とした」と話している。